

近代に於ける歴史認識發展の一考察

田代 秀徳

(8)

歴史は太古より存続して居ると考へられるけれども歴史の領域の發見は人類歴史上比較的新しい時期に行はれたといふ事は注意すべき事である。古代希臘人の世界觀に於ては永恒回歸の思想が優勢なのであつて、諸々の自然哲學者達に依つて論ぜられたる所に據れば世界過程には幾つかの時期が區分せられるのであるが、之等の時期が一通り經過して了へば再び之と同一なる過程が繰返され、かゝる現象が無限に反覆すると考へられた。之はつまり自然過程に基いて一切を説かんとす考である。ヘラクリトスが下への道、上への道を説きエムペドクレスが愛憎の二原理に依つて世界の集合離散を説いた如き皆此種の例に屬する。一般に知られてゐる様に希臘人の世界觀の特徴は世界をば調和、秩序あるものと見る考であるが、此處に考へられてゐる世界は靜的な世界に外ならない。其典型を我々はエレア學派の有や、プラトンのイデアの世界等に於て認める事が出来る。アリストテレスに至つては發展の考が示されてゐるけれども、此發展は主として自然界發展の考察か

(9)

ら説かれてゐるものであり、且又他方に於ては純粹形相存在の明示に依つて世界は有限化されて居る。此の如くして彼に於ても世界は永久的に定まれる秩序に支配せられ、發展が説かれ乍らもプラトンのイデアの世界が其中心を形成して居る。要するに、希臘に於て歴史が説かれなかつたわけではないが此時代には一切が自然中心的に考察されてゐた。

人類に於ける一回的な時間的發展過程としての歴史が初めて特に問題となされ出して來たのはキリスト教的 세계觀の出現以來のことである。然して其典型はアウグスティヌスに認められる所であり、アウグスティヌスは正に近代に於ける歴史哲學の遠い開祖であると云つて差支ない。(vgl. O. Braun, Geschichtsphilosophie, Berlin 1923, S.37f. u. a.) アウグスティヌスは人類の生活經過をば聖書に基いて七つの發展段階に分つて説明して居るが、此發展過程は全く一回的なものであり最早繰返さないと看做された。然し此際彼が此發展段階を決定する唯一の標準と爲せる事柄はキリスト教の教義であつて聖書に依つて傳へられたる人類發生以來の諸時期に據つて人類の實際の歴史を理解してゐる。

故に彼に於ては人類の實際の歴史を親しく調査して經驗的に其發展過程を知り之に哲學的考察を施すといふ事は未だ充分に行はれてゐないのであり、他方に於て時間論に力を注いだけれども、彼の歴史哲學は全く宗教的形而上學に基き神學的なるものであつた。

即、神が人類の進むべき道として定めた計劃をば聖書に依つて知り、人類の歴史が此通りに動いて行くものと看做してゐる。之は生きた歴史を固定した型の中へ押し嵌める事を結果する。然しかゝる考へ方は専ら恩寵の光明に浴してゐた當時の歴史観としては當然なるものであつて、吾人は唯、一回的發展過程としての歴史が自覺されてきたといふ事をアウグスティヌスの歴史哲學的業績に認めればよいのである。

然るに恩寵の光明が薄らいで自然の光明が輝き出したルネサンス以來、人間の世界觀には一大變動が起つた。實に近代に於ける歴史の領域の確實なる把握は此ルネサンスに淵源するものと云つて良いのであり人間再生の波に乗れる現象に外ならない。ルネサンスに於て人間は從來の神本主義から離れて人本主義へ赴いた。即、人間理性の獨立的權威を感じ出したのである。何事も神の決裁にのみ頼つた人間が今や一本立となり獨り歩きを始め出したのが此ルネサンスに外ならない。ルネサンスに於て人間の認識が先づ向つた所は自然であつた。之は、人間が獨立して生活する爲めには先づ自然が何であるかを知らねばならぬといふ實際的要求に支配された現象であつた事は、フランシス・ベーコンの業績などを見ても判る。勿論此際 of 自然研究なるものが單にかゝるものだけに過ぎないのでない事も認められねばならないけれども、兎に角コペルニクスの地動説に依り從來の有限的宇宙觀に對して無限的宇宙觀の導入が行はれた事は人間の自然に對する注意を非常に煽りたてた。無

(19)

(11)

限感なるものは實に近代文化の特徵的產物であり之が又希臘的有限的世界觀に對立する。人類の發展進歩なる事が考へられ出して來たのも此ルネサンスの產物である。從來は、人類は最初から一定の能力を人類的に完成せる形態に於て與へられて居ると考へられてゐたが——其後又啓蒙時代に於てもかゝる考が現れた——今や人類には進歩向上があると看做されるに至りルネサンス的樂天觀を捲き起した。人間は自己の認識結果に權威を認め得る様になり、且認識は一個人・一時代で其終局に達するのではなく無限の時代を経て進歩してゆくと考へられる様になつた。此處に於て歴史事象なるものが人間的の姿に於て捉へられ初めた事を看逃してはならない。即、アウグスティヌスの歴史哲學に於けるが如く、神が豫め決定した歴史過程を人類が迎るといふのではなく人類が自らの獨立能力に依り歴史を形成してゆくといふ觀念が漸次明白になつてきたのである。然し一般の歴史哲學思想に關しては十六・七世紀の頃までは宗教形而上學的なるものが支配してゐたのであり、實際の生きた歴史事實から歴史の意味を究め歴史の原理を洞察するといふ態度は未だ充分には認められなかつた。

ルネサンスは人間の再生であり其認識傾向は直接的なるものを捉へるといふ方向に進んで居る。神學的原理は吾人が兎に角直接的に目撃する所のものではなく一つの傳説に外ならない。かゝる直接經驗を超越せる事柄に満足する事が出来なくなつてきた事をルネサンス運動の出現は物語る。人

問は自ら直接觀察の結果にのみ絶對的確實性、眞理性を認めなければならないと考ふる様になつた。故にルネサンス運動は直接性への要求といふ風に解する事が可能であらう。直接經驗する所のもののみに確實性を認めんとする態度、之がルネサンス以來の大多數の人間の生活を支配するに至つたわけである。然して此直接性への要求は先づ自然の直接的研究といふ方面に現れてきたのであるが、此際認識の根據を直接性に求める傾向を最も徹底的に示して來たのはデカルトの哲學である。デカルトは從來の傳統を一切疑つて遂に *cogito, ergo sum.* なる所に、哲學即學の根本原理及標準を發見した。自然を人間が自ら觀察して得られたる原理は、神學的教義として天外より與へられる原理に比して直接的である、少くとも人間にとつては直接的であると云へるが、自然界は未だ外物であり人間を超越せるものであり、人間に對立するものである以上、異物としての自然界に關する原理は直接性の最も示されたる原理とはいへないのである。人間にとつて最も直接的なるものは何かといへば、それは結局自らの意識事實より外にないと云はねばならぬ。デカルトは此の如くして最も直接的なる事柄として *cogito, ergo sum.* なる事柄に達し之を唯一最高の原理と看做したのであり、ルネサンスに於て示されたる直接性への要求はデカルトに於て一先づ一定の發展段階にまで進んだと見る事が出来る。

(12)

デカルトに始つた近世唯理論はスピノーザに於て其發展の一つの極點に達した。デカルトに於て

(13)

は *cogito, ergo sum.* が最高の眞理となされる限り一切の眞理は皆理性的構造を持たねばならないといふ事が演繹せられて來るのであり此唯理論はスピノーザの哲學を産出せねば已まなかつたのも當然の勢である。スピノーザに於ては一切の現象は永恒の相の下に於て眺められ、すべては自然自らの示す絶對秩序に依り生滅を反覆して居るに過ぎないと考へられ、非歴史的世界觀の典型的思想を示した。スピノーザに於ては、時間的繼起の世界は全く顧みられず、之は單に實體の様相と理解せられたに過ぎなかつた。然し世界はかゝる自然必然的な數學的秩序のみの領域からは成らないと考へ、スピノーザ哲學の難點たる一對多の問題を逆の論理に依り解釋せんと力めたのがライブニッツに外ならない。

ライブニッツに於ては、實體性はスピノーザに於けるとは正反對なるものに認められ個物的なるものが實體として認められたのである。スピノーザに於て全然顧みられなかつた個體性の意義が認められるに至つたのである。個々の現象は一般的なるものの單なる顚例であるといふ風に考へないで、個々の現象はそれぞれに個性に依つて區別せられると云ふ事がライブニッツの單子論の目指す所である。個物は相互に異なる方面を示す。従つて個體的なるものそのものに實體性が認められねばならないと云ふのがライブニッツのスピノーザに對する根本精神であつたと云へる。

此事は種々なる形式で彼の思想に於て示されたわけであるが「單子は窓を持たない」と云ふ表現

にも此意味が現はれて居る。實體としての個々の單子は相互に根本的な關係交渉を持つことは出来ない。デカルト以來の實體概念に基いて、實體としての各單子は相互影響を及ぼす事を許されなかつた。此處にライブニッツが個性の世界を認めた事が窺はれる。歴史事象は個性を離れては理解を許さないのであり、各個人或は各國民等の個體の本質的なものの集積が歴史である以上、ライブニッツの此考は歴史の把握に非常なる影響を及ぼしたと云はねばならない。更にライブニッツに於ける歴史哲學的に重要な思想は、彼の事實的真理に關する者である。デカルト以來の唯理論では、真理は理性的であり理性的真理のみが絶対性を持ち得るとなされたのであるが、ライブニッツは此種の真理以外に猶、事實的真理の領域を認めるに至つた。此事はライブニッツの論理的思惟そのものの發展を意味する以外に、又ライブニッツ自身の多面的なる生活經歷に影響されてゐる所が多いと云はねばならぬ。即、彼は多面的人物として種々なる事象に接し理性的真理一種では説明のつかない具體的な非理性的事象に直面せしめられたのであつた。そこで彼の真理概念の擴張が企てられた。理性的真理とは其反對を絶対に考ふることを許さざる如き真理であり、之は數學的殊に幾何學的真理が典型的に示してゐる。三角形の内角の和は二直角なりとの事は、絶対に然く考へざるを得ざる真理である。然るに今雨が降つてゐるのを見て、雨が降つてゐるといふ事を知覺したとする。然る時には此知覺内容としての雨が降つてゐるといふ事も亦絶対的に確實なる事柄と云はねばなら

(14)

ぬ。即、直接的表象事實としての雨が降つてゐるといふ事柄は矢張り一個の眞實なる事柄即真理とせられねばならぬ。但し此際、雨が降らないと云ふ事は自由に思惟し得る所である。唯、今雨が降つてゐるといふ知覺内容としての事實の眞實性が疑へないのである。そこでライブニッツはかゝる真理を特に事實的真理と名付けて前の理性的真理と區別した。然らば理性的真理と事實的真理とは如何なる關係の中に立つのであるか。理性的真理の基く所は矛盾の原理であるが、事實的真理はライブニッツに依れば、充足理由の原理に基く。即、あらゆる事象はそれが起る充分なる理由を持たねばならぬと云ふ原理に基く。然るに矛盾の原理と充足理由の原理とは共に直觀的確實性に立脚せるものであり此點に於ては兩種の真理は同種の姿を示してゐる。然しライブニッツは理性論者として理性的真理の側に真理としての優越性を認めざるを得なかつたのであり、事實的真理は人間の理性に對してのみ存在するのであつて神に對しては理性的真理のみがあると做し、事實的真理が認められるのは人間理性の未發達を證明すると説明してゐる。

又、次に此兩種の真理の命題的構造を考察してみると、理性的真理は分析命題に屬する。即、賓辭は既に主辭の中に其本質的必然的屬性として含まれて居るのであつて主賓の結合は全く絶對的必然性に據つて構成せられるのである。

然るに事實的真理に於ては主辭と賓辭との結合は偶然的であり、主賓の結合は全く偶然的必然性

(15)

に依り構成せられるに過ぎない。即、事實的真理は命題的には綜合判斷を形成するものである。吾人は此處に既にカントの認識論の萌芽を認めざるを得ないのであるが、ライブニッツは此の如くして遂に必然性にも二種類を區別するに至つた。事實的真理に於ける主賓の結合は兩者を如何に分析するも其結合に或非理性的要素が残るのであり、其結合の必然性は結局遂に事實として之を承認せざるを得ないものである。歴史の領域なるものが此事實的真理の領域と密接に關係のある事は云ふまでもないのであつて、論理的必然性に據り結合せられる領域關聯には元來歴史なる觀念は起らないのであつて、或原因があり、その結果が事實として之に連結したといふ場合に歴史現象が認められ来るのである。豫め理由・歸結の關係に據り支配せられてゐる領域は純理性的領域であり之のみが歴史の全面ではない。寧ろ歴史本來の場面は原因・結果の事實連鎖を形成する。詳言すれば、少くとも事件の連鎖が事實的因果關係の側から見られ、そこに個體的事件の連鎖が認められる所に歴史の認識論的意義が捉へられてゆく。此意味に於てライブニッツの事實的真理の領域は正に歴史の領域に關係してゐると云はねばならぬ。具體的事實の連鎖、之が認識論的に見られたる歴史である。(vgl. W. Windelband, Geschichte der neueren Philosophie Bd. I, 7. u. 8. Aufl., Leipzig 1922, S. 467 ff.)

(16)

十九世紀は自然科学的世紀であると云はれる。ルネサンスに端を發したる實驗的研究の流れは十

(17)

九世紀の後半に至つて其爛熟時代に入つたと云つてよい。然して此傾向は所謂實證主義なる名稱の下に綜括される事が出来やう。何事も直接的觀察に基いてこそ確實性を獲るのであるとの信條が益々徹底せしめられてコントの實證主義も主張されたものと見る事が出来る。然してコント的實證主義とは感覺的經驗に基いて證明せられ得る事柄のみに頼つて初めて真理は獲得出来るといふ認識論上の見解を基調とする。之に依り一切の自然に關する思辨は排斥せられたのであるが、精神現象に關しても此實證主義の立場は實驗心理學の形式に於て示されたと見る事が出来る。此の如き實證主義はやがて科學主義を産出し自然主義を起したのであるが、此十九世紀が又他方から見れば歴史學的世紀と云はれねばならないのである。學としての歴史、從つて又歴史哲學が獨立勃興してきたのも亦此世紀に外ならない。此事は一見奇異の感の人々に起させる。自然科学と歴史學との同時的勃興といふ事は如何なる意味を持つのであらうか。何事も直接的觀察に基かねばならないとなせるルネサンスの精神が實證主義となり、之が自然科学の隆盛を將來したのに、他方に於て過去の事件を取扱ふ事に没頭する如く見える歴史學が勃興して來た事は何を意味するのであるか。現に吾人が感覺的に知覺し得る事柄のみに吾人の知識の根據を制限せんとす實證主義の時代に於て、兎に角最早存在しないと思はれる歴史事件の把握といふ事に對して如何にして意味が認められるか。實證主義の立場から見るとは歴史の領域は眞に頼りないものであり、最早存在しない、少くとも感覺的

には最早永久に認知せられ得ない事柄を唯少數なる記録を頼りに想像してゐることになる、かゝる歴史を對象となす歴史學は實證科學から見るならば最も其學的根據の薄弱なるものと云はねばならない様に見える。

然し一見奇異に感ぜられる此實證科學と歴史學との兩立現象は兩者の勃興が一面に於て實は矢張り同じ様な根據に立てる思想傾向に基く事に因る。元來實證主義の起りは上述の如くルネサンスの潮流に乗せるものであり、此潮流は直接的なるものへ、人間的なるものへの傾向に外ならなかつたのである。ルネサンスの頃に於ける人間の問題は主として自然に向けられた事は文化發生上當然なる傾向であり、此自然研究の精神が實證科學の出現となり、之が今や完成されつゝあるのである。

然るにデカルトの業績に於て認められる如く人間にとつて最も直接的なるものは自然ではなくて、人間自身であらねばならない。人間の自己内部の事、之が人間にとつては最も直接的なる事柄である。故に直接的なるものへの傾向を徹底せしむるものは實に人間の内的なるものを捉へる事に向つて初めて眞に直接的なるものを直接的に捉へる事が出来るのである。自然の觀察は神學的自然説明に比すれば直接的なる自然認識法であるけれども、自然は人間にとつて最も直接的なる事象そのものではない。人間にとつて最も直接的なるものは人間自身であらねばならぬ。自然の觀察も人間自身が自己内部を省察する事に比すれば間接的であり、従つて此意味から云つてもその成果は間接的

(13)

確實性を有するに過ぎない事になるのであり、絶對的の意味に於ける直接的確實性は人間の自己意識把握が示すのみである。故に直接的なるものへの精神が人間の考察に、人間の内部考察に向ふといふ事は、決して實證科學の精神——その歴史的背景から考へて——と矛盾するものではなく寧ろその徹底化を物語るものに外ならない。眞の意味の現實を捉へんとする努力がルネサンス以來の人間の努力であり、之が今や人間理解といふ方面にその姿を示して來たのである。

デイルタイに依れば、自然は之を認識するのであり生は之を體驗し理解する、或は解釋するとなされる。人間内部に示される現象の全體、之を生と名けるならば生現象の把握が、自然現象の把握に比して一層直接的確實的であるといふ事はデイルタイならずとも承認することが出来やう。生の把握とは人間が認識の對象と一體となつて之を全體的に把へる事に外ならない。事象の最も直接的なる把握とは之と一體となるといふ形式に於て最も良く實現せられる。生の本質を形成するものは非理性的複合構造關聯であり一般性を以てしては律し切れない個性的なるものにある。歴史とは畢竟かゝる非理性的個性的生事實の連續に外ならない。各個の生は個性的といふ意味に於て勿論一回的な事象であり、かゝる一回的事象の事實的連續が歴史の領域に外ならない。デイルタイはかゝる生の概念に基いて彼獨特の精神科學の基礎づけを行つたのであるが、デイルタイの精神は矢張り直接態を直接的に捉へるといふ努力と看做することが出来るのであつて、自然科學的認識は間接的異物の認

識として其眞理價值が疑れるに至つて居る。デイルタイの態度はコンツの實證主義に反對するけれども實證的といふ事の意味を直接的なるものへの要求と解する限り實證的精神の徹底化を示すものと解せられる。過去の事象は最早存在しないと一應は云へるであらう。従つてかゝる存在しない事象の認識は自然の認識に對しても、より以上に間接的と云はれねばならないかも知れない。然し自然は決して吾人の體驗するを許さざるものなるに反して、歴史はそれが生の現象である限り再體驗を可能とする所のものである。即、理解や解釋の可能なる領域である。理解、解釋なる再體驗に依り吾人は過去の遺物を親しく捉へるのであり、此場合の體驗は自然の觀察に比すれば矢張り一層直接的なる把握であり、且一層直接的なるものを捉へてゐるに外ならない。故に歴史認識なるものがルネサンス以來の直接的なるものへ、現實そのものへの傾向を推進せしめたる場合當然採らるべき方法態度であるといふ事は否定出来ないであり、他方に於ては觀念論的歴史觀と相俟つて之が近代的實證的自然科學と並行して歴史學が勃興し來れる重要なる理由の一つであると思はれる。

(vgl. H. von Astor, Die Philosophie der Gegenwart, Leiden 1935, S. 47 ff.)

ルネサンスは人間の發見であるに對してロマンティックは個人の發見であると云はれてゐるが、ロマンティックの此傾向は哲學方面に於けるよりは寧ろ文藝の領域、殊に獨逸のロマンティックに於て認められる傾向である。フイヒテの自我哲學等との結合に於て獨逸の前期浪漫主義文士の彷徨せる世

(20)

(21)

界は古典派の有限的靜的典型的なる世界に對して動的無限定的個人の領域に屬し之が延いて非現實的なるものとしての過去の歴史に溯るといふ傾向を伴つた。此事は歴史認識に於ける實證主義的傾向に相反するけれども、他方理想主義は歴史理解といふ方面に於て近代的歴史認識に密接に關與する事になつた。浪漫哲學の方面に於ては我々寧ろ普遍的絶對的自我として考へられ、ヘーゲルに於て眞理は一時代に於て示されず時間的經過を通じて發展的に其全貌を示すとの考に依り歴史に對する自覺が高められた事は否定出来ない。但しヘーゲルは唯理論の純粹性を保つものであり、精神的發展の概念を力唱する事を眼目となしたが、彼が歴史的自覺に根本的貢獻を爲した事は否めない。又歴史に於ける客觀的な側面が巧妙に説かれた事は周知の如くである。デイルタイの思想の如きは、此ヘーゲルの客觀精神的歴史觀を採りつゝ更に歴史の主觀的側面を明白になさんと力めたものと解することが出来る。然してデイルタイの思想は非理性的なる自我を世界人生の根本と見るものでロマンティックの零圍氣内に漂ふのを見る。近代的歴史觀は自然に對する歴史の特異性の認識といふ點に於て示される。此點から見ればヘーゲルの歴史哲學の如きは歴史と自然との根本的對立を認めないものであり——辯證法的對立はあるけれども自然も精神の一發展段階に外ならない——一切は理性的となすものであり、歴史の本質を未だ充分に捉へてゐない。歴史に關してはその客觀的側面の把握が力められると共に更にその主觀的側面のそれが力められねばならぬ。キェルケゴールが可

能性の世界に對して現實性の世界を對立せしめ人生の眞髓を後者に認めた事は現代に於ける歴史の主觀的側面からの把握に最も關係の深い考であるが、之も矢張り直接態への努力の現れと見るべきである。理性や論理の領域に對する實踐、行爲、自由の領域の確認は畢竟自然に對する歴史の領域の自覺を物語る。要するに直接的具體的世界としての歴史の認識は自然認識に對立し乍らも又之と呼應しつつ近代文化の產物として示されて來たものであり之は結局眞の現實の直接的把握なる人間的努力の發現と看做す事が出来る。(昭和一〇・五・二九)